

■報告(1)東北公益文科大学

『山形県酒田市と庄内町における住民主体のコミュニティ再構築活動の研究』

武田真理子 東北公益文科大学准教授	3年生
飯野つや子 庄内町情報発信研究所研究員	漆澤 望 同学部4年生
菊地 亮哲 まちなか未来研究室、酒田商工会議所酒田TMOタウンマネージャー	上野 彩佳 同上
高橋宏市郎 東北公益文科大学公益学部	遠藤紗耶香 同上
	近藤 創一 同上
	佐藤 麻美 同上
	田中 浩二 同上

司会:定刻となりましたので、平成19年度都市再生研究助成事業に係る最終報告会を開会いたします。

今日は平成19年度都市再生研究助成事業においてそれぞれのご研究に助成申し上げている東北公益文科大学及び香川大学大学院地域マネジメント研究科の先生方から報告をいただきます。

まず、東北公益文科大学・武田真理子先生を中心とする共同研究者の皆様、『山形県酒田市と庄内町における住民主体のコミュニティ再構築活動の研究』についてご報告いただきます。研究成果を収めたDVDの上映を含めご報告いただきまして、その後、15分間質疑応答いただきます。

先生方のご経歴は配布した資料をご参照ください。

なお、本日は、小松隆二・東北公益文科大学前学長にもお出でいただいております。

それでは武田先生、皆様方よろしくお願いいたします。

武田准教授:ご紹介いただいた東北公益文科大学の武田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日は、お陰様で大勢で押しかけ、後ろに一緒に共同研究している

学生がいる。話す機会もないので、まず簡単に自己紹介させていただきたい。

飯野研究員:こんにちは。庄内町情報発信研究所の飯野つや子と申します。よろしくお願いいたします。

菊地マネージャー:酒田商工会議所まちづくり推進機関にて、まちづくりに関わっている菊地と申します。よろしくお願いいたします。

高橋氏:こんにちは。東北公益文科大学3年、高橋宏市郎です。よろしくお願いいたします。

以下、学生挨拶・略(4年:漆澤氏、遠藤氏、上野氏、佐藤氏、田中氏、近藤氏)

武田准教授:パワーポイントスライドに沿って始めさせていただく。

大学が所在する山形県酒田市、それから庄内町における住民主体のコミュニティ再構築活動の研究で、2つのテーマを並行して進め、庄内地域全体を考える趣旨である。

公益大学の学生、庄内町情報発信研究所とまちなか未来研究室3つの組織が共同で行っている。

公益大学は伊藤滋先生にも大変お世話に

なってきたが、開学9年目の新しい大学。庄内旧14市町村(当時)と山形県の設立による公設民営の大学で、学生数が学部約800人という非常に小さな規模の大学である。初代学長は小松隆二。

庄内町情報発信研究所は、山形県の農業が大変盛んな地域の代表地である庄内町で、2005年に町民ボランティアが、町民主体のまちづくりを進めようと、行政と一体となつてつくったまちづくり組織。

まちなか未来研究室は、酒田市の中心市街地の活性化を大学と地域で協働して進めるため、酒田商工会議所と大学により構成される任意団体である。

研究テーマは、お手元の配付資料をご覧いただきたいが、問題意識は、全国に共通の課題である。中心市街地の空洞化と地域コミュニティの変容が、人口減少を背景として進んでいる。これらを検討するため、酒田市内で、大学生のまちなか居住研究、庄内町で、災害時要援護者支援の研究を行う。一見ばらばらのようなのだが、どうしたら地域を住民主体で活性化できるか、新しい地域のネットワークを強化できるかという視点が共通している。私たちの研究の特徴は、いわゆる都市計画、工学系の学術的な研究と若干異なり、住民主体のまちづくり・地域づくりの視点で共同で研究を行うということと、その成果を実際のまちづくり・地域づくりの実践に結びつけたいという趣旨である。

酒田市と庄内町の現状と課題は、お手元の資料をご覧いただきたい。

さて、最終報告に移らせていただく。

まず酒田市における大学生のまちなか居住研究は、大事な住民のグループの1つである大学生のまちなか居住を検討するため

の物件調査を継続的に行ってきた。

2つ目は、ワークショップ。地域とともに研究会、報告等をして情報や課題を共有し、実践に結びつける活動を行ってきた。山形県と共催で進めてきたが、県は私たちのこれまでの共同研究活動等を踏まえ、2008年度から本格的にまちなか居住の施策に取り組み始めた。その最初の段階として、酒田市をモデル地区に選び、本格的な空き家調査を開始した。一緒に検討等も含め進めてきた。

3つ目は、既存研究、動向の分析、視察調査等も行った。学生のまちなか居住は、古くて新しいテーマ。最近の研究動向としては、国立大学が田園地域に移転する、例えば70年代の広島大学の移転に伴う新しい学生まちづくりをどう計画したか、住民がどう反応したかとかの研究がまず挙げられる。

もう1つは、中心市街地活性化という視点で、基本計画に盛り込みたいという趣旨等で学生のまちなか居住を検討し、研究して提案をしていくようなもの。例えば、上越市の例があるが、実際に形になったものをまだ確認できていない。なかなか難しいことと思う。

それから学生街の研究。本郷、早稲田等古くからあるが、どこも周辺地域の衰退など様々な変遷があつて、これからどうなるかという視点からの研究がいくつか見られる。その既存研究等を分析すると、学生のまちなか居住の推進要因は、大きくは、(1)の都市計画、政策的誘導、もう1つは当然ながら、(2)学生側の主体的な動機付け、学生自身の取り組みの両方がある。(1)は進んできたが(2)はどうなのか、という疑問が残る。

学生街は、単なる商業集積地区ではなくて大学まちづくりというか、商業だけでなく、地域の人口が減少し変容していく中、学生とど

う共生していくか、或いは共存して地域づくりに貢献していくかが重要ではないか。その視点で、学生自身の研究、学生自身の実践の発信として私たちの研究を進めていこうと中間報告以降、固めてきた。

学生の部分について、高橋から2項目、簡単に説明させていただく。

高橋氏:最初に、まちなか居住に係るアンケート調査の結果を報告する。お手元の「酒田市中心市街地に関する大学生の意識・ニーズ調査」という冊子を参照されたい。

アンケートは、まず学生のニーズを知ろうというところから始まった。武田先生と菊地さんに学生の足りない部分をご協力いただいたが、基本的にアンケート内容作成、集計、冊子づくり等、学生が中心になった。

アンケート結果のポイントは、学生のアルバイト先の40%が酒田市中心市街地にあった。(p.20) また、アルバイトに伴ってだと思いが、約3割の学生が、飲み会等の楽しむ場所としても中心市街地を利用している。しかし、居住は、やはり、大学周辺のアパートに住んでいるのが現状である。

図表-1
「酒田市中心市街地に関する大学生の意識

ニーズ調査」

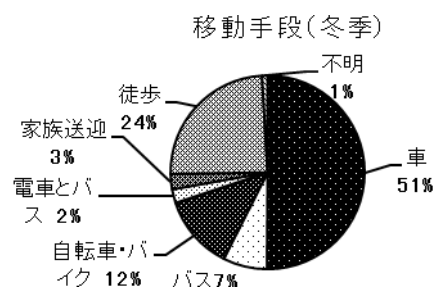
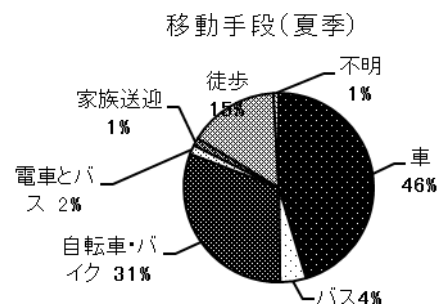
一 調査方法

(1)調査内容：東北公益文科大学学生の生活実態について、①生活費、②移動手段、③居住、④課外活動、⑤買い物動向、⑥飲食の場所の6分野、34質問項目(内、自由記述回答項目15)から構成されるアンケート票を作成し、授業等の時間に回答を依頼した。
(2)調査対象：東北公益文科大学公益学部全学生
(3)調査実施日：平成19年12月12日～12月20日
(4)調査票回収実数：計421

図表-2

「酒田市中心市街地に関する大学生の意識・ニーズ調査」

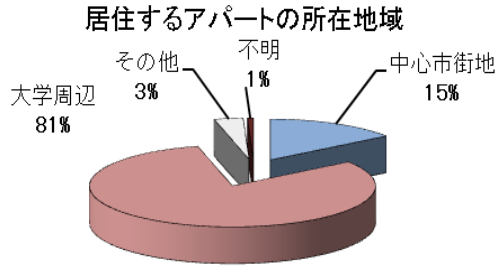
一 公益大生の移動手段



図表-3
「酒田市中心市街地に関する大学生の意識・

ニーズ調査」

ー公益大生の居住 (2) アパートの場所



図表-4-1

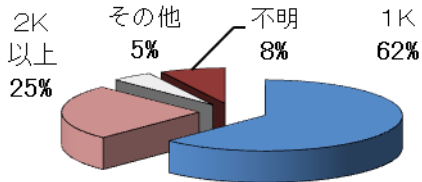
「酒田市中心市街地に関する大学生の意識
ニーズ調査」

ー(3) 住まいに関するニーズ

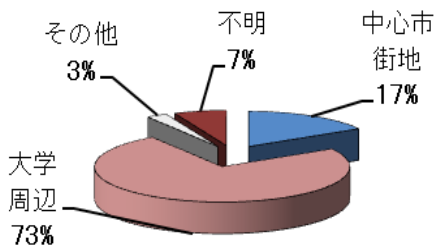
住まいを選ぶ基準

	1位	2位	3位	4位
立地	92	102	68	65
家賃	181	98	32	15
設備	45	91	143	40
広さ	8	27	79	207

アパート等の広さに関する希望



アパート等の場所に関する希望

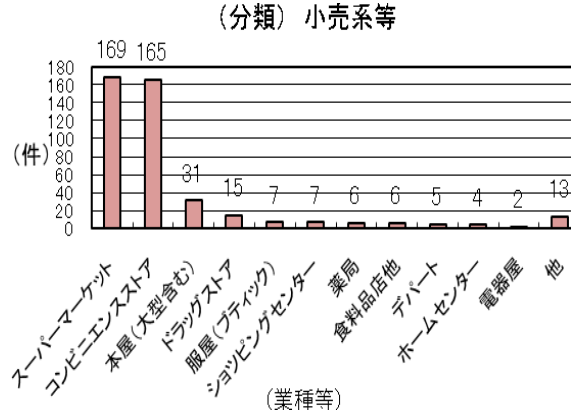


図表 4-2

「酒田市中心市街地に関する大学生の意識
ニーズ調査」

ー住まいの近くにあったら良いもの

(分類) 小売系等

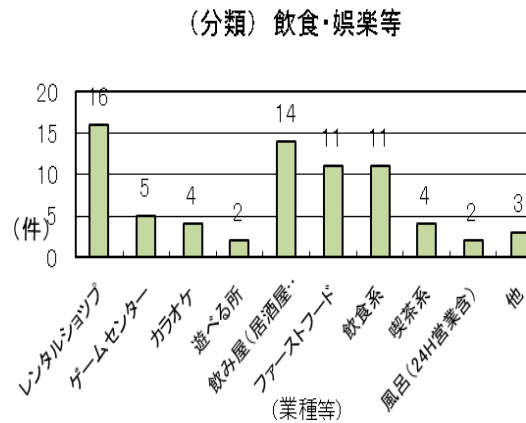


図表-4-3

「酒田市中心市街地に関する大学生の意識・
ニーズ調査」

ー住まいの近くにあったら良いもの

(分類) 飲食・娯楽系



続いて、(5) 視察調査の報告をしたい。先
進的な学生まちなか居住を実践している都
留文科大学「work-waku 都留」のアパート再

生計画を視察した。「work-waku 都留」は、主に学生がメンバーで、講義がきっかけとなりアパート再生計画を開始した。「work-waku 都留」は、「自分たちのエゴから始まるまちづくり」を実践している。地域の人ともっと交流したい、アパート暮らしをもっといいものになりたいという自分たちのエゴから始めるというのは、とても魅力的であった。「work-waku 都留」は、大学の移転によって賑わいを失った学生街に空きアパートを見つけ、自分たちでアパートを改装し、自分たちの居場所づくりを行う。資金集めから改装まで自分たちで行う。周囲からのサポートもいくらかあったようだが、主に学生がやっている。

完成した「つる小屋」は、おしゃれな内装で、住んで楽しい空間。これは、学生にとりかなり魅力。自分たちの好きなように、住みたいようにつくったというのは、僕もあこがれる。そして、住民・学生のどちらも寂しいというニーズが合致したのが要点か。

続いて、高島平再生プロジェクト。高島平再生プロジェクトは、地域活性化を目的に、学生の居住誘導と大東文化大学と地域の協働によるまちづくりをセットで実践している。目的は、少子高齢化に伴い賑わいが失われた団地を復興し、活性化すること。UR都市再生機構から大学が部屋を借り上げ、大学が借りた部屋を学生に貸している。大学が学生と団地のつなぎ役、団地コミュニティ同士のつなぎ役になっているのが伺えた。

武田准教授: 以上のプロセスを経てこの1の研究の目的は、行政と地域、商店街等との協働によってこのテーマについて課題分析し、政策立案をしていくということだった。

その内容については菊地から簡単に報告

させていただく。

菊地マネージャー: 大学は、平成13年に開学以来、街の活性化、中心部の活性化と係わりを持っている。大学に力を貸してほしい共同で何かできないだろうか、これまでも、まちなか居住以外にも多様な形で取り組んでいただいている。学生のまちなか居住の取り組みは、その中の1つ。

配布資料にて「酒田市中心市街地活性化基本計画策定プロセスにおける課題の共有、或いはその具体的施策の検討」となっているが、「まちなかドミトリー」構想が記された両面コピーの資料がお手元に配布されている。これは出してよいか迷ったが、酒田市が基本計画を策定する過程でつくった資料である。昨年1年間、酒田市は、活性化基本計画の策定にかなり追われていた。基本計画は、お陰様で3月下旬に国の認定を受けた。この4月から本格的に動き出している状況。

基本計画の中に学生のまちなか居住を政策的に盛り込めないかと、これまで様々なアンケートを通して得られたデータを基に、酒田市にいろいろな形で提案をしてきた。2008年11月、12月にいろいろな事情があり、断念せざるを得なかったのは残念だ。実は、大学開学と同時に大学周辺にたくさんのアパートができた。これらに空室が目立ち、まだ減価償却が終わっていない。市は、地域の声も無視できず、旗振り役として学生のまちなか居住を大々的に進めることは難しいと断念した。

ただ、いろいろな事例があり、細かい形でもよいかからまちなか居住を進めていこうという考え方は、市と共有している。小さいながらも今後とも行政も含めて取り組んでいけるよ

うにアプローチしたいと考えている。

最後に、学生まちなか居住に関する将来デザインの考察だが、これまでいろいろな形で学生と町がどう係わっていくべきか、現実的な対応を含め、様々な検討をしてきたが、現在、1つのデザインはできあがっていないなお継続して取り組んで行きたいと思う。

武田准教授:今日は最終報告会だが、現段階でご報告できることは以上である。

庄内地域で酒田は「大学がある街」という特徴がある。その特徴を生かす。それからやはり酒田の街のセンターとしての機能も依然庄内では大きい。これから、単身の高齢者、学生等が大きなグループになると思う。それらの対象を中心にどうしたら地域で共存できるのか。協働、共存の文化をどうやって構築できるのかを、引き続き、学生まちなか居住というアプローチからも継続して行きたいので、今後の研究活動計画を付けた。

2つ目の研究テーマの報告に移らせていただきたい。

庄内町は、前のスライドにあったように、伝統的なコミュニティと言われてきた。しかし、就農人口が減少し、地域コミュニティが大きく変容した、いわゆる昔の農業地域である。そんな中でどうしたら、高齢者、障害児・者等を含む地域コミュニティの絆を強化できるかということで、キーワード「災害時要援護者支援」を取り上げてきた。

こちらの助成金を使い、共同研究者とともに被災地へのヒヤリング、福祉事業所、専門機関の視察も行わせて頂いた。一番有名な所は、新潟県長岡の高齢者総合福祉センターで、24時間365日の在宅福祉サービスを展開している。これからお見せするDVDでは専門機関の役割については割愛した。DVDづくりにかなり時間と労力をかけた。地域住民向けに、地域コミュニティを強化するツールとして、使っていきたい。今後ワークショップ等も展開したい。一般住民向けなので、皆様にとり当たり前のことも入っていると思うが、飛ばし飛ばしでご覧頂きたい。

最終報告②庄内町における住民主体の災害時要援護者支援に関する研究

(1)被災者へのヒヤリング調査

◇新潟県十日町市・柏崎市への視察研修:

- ・日時:2008年2月10日～2月11日
- ・視察研修先:NPO法人支援センターあんしん(十日町市)
NPO法人トライネット(柏崎市)
- ・研修内容:未だ中越・中越沖地震の傷跡が残されている各地域において、障害児者の地域生活支援・就労支援の実績のあるNPO法人から、被災時の様子、要援護者支援の実態、行政・事業者・近隣住民・ボランティアの各主体が抱える課題などについてヒヤリング調査を行った。

◇新潟県十日町市へのインタビュー調査(DVD用)

- ・日時:2009年2月16日～17日
- ・調査対象者:NPO法人支援センターあんしん職員、利用者等
- ・調査内容:DVDの第3部「被災障がい者・高齢者の実際」への掲載を目的とし、中越地震直後から数日間、どのように過ごしたか、心身に障がいのある方の立場から様々な課題についてインタビューを行った。

<DVD・略>

すみません、ちょっと音声が悪い。バリアフリー／ユニバーサルデザインでもう少し工夫し、文字も入れ、体験共有のツールとしたい

<DVD・略>

まず第1部で近年の震災の被災状況等を共有し、なぜ要援護者支援か、災害弱者の実態等について説明する。

第2部で災害にどう備えればいいのか、夏に自分たちが住む地域の実態を知ろうと、実際に備蓄品等を使って体験(1泊)した。それを基に、災害への備えを自分自身のこととして考えられるように制作した。その上で、要援護者支援

について考えてもらうという構成である。

庄内町は、災害時の要援護者支援の台帳登録制度を進めてきた。東北では早いほうで、ほぼ完了した。実際に行って課題が分かった。個人情報保護の問題、要援護者を

年齢で区切っているため、支援できる人も要援護者にまわってしまう等の問題が共有できている。それらを説明した後で要援護者について更に考える内容である。

<DVD・略>

まだ編集が不十分だが、実際に被災体験された要援護者の代表者のインタビュー等を入れたのが第3部。十日町で障害児・者の地域生活を支援しているNPO法人を調査し福祉サービス等を提供する支援者側の声も入れた。

<DVD・略>

第4部、普段地域の中で近隣、家族は何ができるかということで、ハザードマップを地域の要援護者等を含めて一緒につくることを提案した。実際に庄内町の自治会、飯野さんと飯野さんの息子さん、地元の高齢者と一緒にハザードマップづくりのワークショップを実施した。

最後に、そこで得た情報をまとめ、提案という形で映像にし、ハザードマップづくりの

手順等も説明した。手順を紹介しつつ、実際に行った映像を入れて説明をしている。ハザードマップをつくるだけではなくて、対策を皆で施して、地域の課題に取り組んでいくステップを提案した。

DVDは、今後、学校、福祉事業者、医療関係者等を対象としたバージョンもつくりたい。

最後の研究成果と課題だが、昨年と同じところもあるが、目的の最後の段階まで行けたところも部分的にはある。今後の課題としては、それをさらに進め、スキルアップし、研究を深め、発表したい。報告書等は、作成中である。皆様からいろいろなご意見をいただきながら、さらに継続していく。

今回は、伴理事長からも伊藤先生からも将来的なデザインを示していくことの重要性をご指摘いただいた。そういうものをさらにブラッシュアップして、地域と協働しながらデザインづくり、それを生かした地域づくり、まちづくりに貢献できればと思っている。よろしくお願ひします。

司会:ありがとうございます。それではご質問、ご意見のある方はどうぞ。

伊藤所長:はい、年寄りですので1番始めに。どうもありがとうございました。2つお伺ひしたいが、まちなか学生居住は、大東文化大学とか都留文科大学に行くと、先ほど菊地さんがおっしゃったが、それぞれの町の事情がある。もうアパートをつくってしまったのだから、学生を確保するのに、そんなに無理してまちなかに行かせたら、借金を返せない、どうするんだと、よく分かる。そういう話は、地方では多いと思う。だから理念的にまちなかに

学生が住まえばいいと言うが、地域の社会的な事情を考えると、難しいかなと思う。

その辺、酒田のケース、都留のケース、大東文科大学の板橋のケースに何か共通するところがあるか？酒田だけの特長、特質だったのか？要するに、現場をよく調べればそよく分かるのだが、そういうことの手前で役人、学校の教師は、「まちなかに学生を集めればいいじゃないか、年寄りも喜ぶじゃないか」と言う。言うが、おそらく実際にできない。そういうことで、酒田だけの事情なのか一般論なのか。大変興味があるので聞かせてください。

武田准教授:はい。先生のほうがよくご存じの分野だと思うが、私たちの視点として、先ほどの上越市の基本計画等に盛り込まれているように、やはり全国的に共通する事情はあると思う。

大学がある所は、若い人が塊としている。それを何とか生かせないかというシンプルな発想も含めてあると思う。酒田の特徴は、やはり、大学ができた経緯だ。昔から何十年もあった大学ではなくて、もともと学生文化がなかった。一方、地域立というか、地域の皆さん特に酒田は力を入れてくださったが、大学まちづくりが開学の理念として掲げられ、出発した。

例えば、高橋君が空き店舗の2階を改装し学生がシェアハウスをしたいと不動産屋に相談をしたら、地権者＝大家さんが改装費を出してくれたので、シェアハウスを始めて二代目である。住むだけでなく、まちづくりである。空洞化が進んで、商店街の活性化等も一緒にやっているが、それと連動した居住を進めようという合意形成がある程度できてきたのが1つの特徴と言える。

どうですか、菊地さん……。

伊藤所長:もうちょっと、今のは大変僕たち
商売柄、興味があるんですが。

菊地マネージャー:共通しているのは、酒田
の実態を踏まえ推測すると、アパートがどの
くらいあるかは、税務当局が把握している。
ただこれは開示しないので、マーケティング
に使うということは現実には非常に難しい。

今回は、「ちょっと教えてよ」といって調べた。
そうしたら、中心市街地、酒田市役所から何
キロ以内という至近距離にアパートが部屋数
約400ある。その中で空室として募集してい
るのは10%に満たない。非常に特徴的だ。

ほかの地域でもアパートは雨後の竹の子
のごとく増えている。一定の地域だけとても
人気が高いことが分かる。酒田の場合、大学
周辺も含めてアパートが郊外に立地してい
る。ロードサイドに集まっている。お手元の資
料の中にも入っているが、年間を通して常時
500部屋ぐらいいは空いている。これは全体
の中でかなり大きな数字。中心市街地はこ
のうちの何分の1かのエリアで、アパ
ートの部屋数そのものは少ないが、空室率
がとても低く稼働率が高い。

将来的に学生のまちなか居住というだけ
ではなく、郊外に投資をしていくことが本
当にいいのか、もうUターンをしなければ
いけない時期が来ているわけです。おそ
らく、各都市とも共通している部分があ
るのではないかと。

大西教授:今の点に関連してお聞きしたい。
高橋君が説明してくれた調査報告書で、
学生が大学のそばに住むか、アパートを
まちなかで借りるか、単にどのアパ
ートを借りるかだ

と、まさにどちらのアパートが埋まるか
という地域間の競争。まちなかに住んで
ほしいという背景は、まちなかに住むと、
学生自身も今まで大学のそばではでき
なかつたことができたり、それが町の活
性化につながると期待するから。何か
ショップみたいなもの、たまり場をつ
くっておられましたね。

これを拝見すると14ページに「公益大
生の居住」というところがあり、中心市
街地に15%が住み、大学周辺が81%
である。81%と15%だが、その人た
ちの日常行動がこういふふうに違
う。まちなかに住むとこういふことを
やることになったとか、そういふこと
が分かる、まちなか居住がいいとい
うのがもう少し浮かび上がってくる
気がする。それも調査されていたら、
教えてほしい。

それからついでに、後半のほうの庄内
町のほうで1つだけお聞きしたい。ス
トーリーはよく分かりました。けれど
も、結局、災害はいつ来るか分から
ないので、今、調査をされている
ワークショップをやっても、2〜3年
経つとだんだん忘れていくと思う。そ
うならないように、「防災の日」なん
かを決めて、その時にこの地域で、
近所でお年寄りの方とか、身体が不
自由な方を助けるということが大事
だということであれば、そういう訓練
を年に1回ぐらいい実地でやると、
訓練とはいえ実際に運び出したり
すれば皆やり方が分かる。そうす
ると、研究成果が生きてくるのか
なと感じた。そんなお考えがあるの
かどうか。

高橋氏:最初の、大学周辺に住む人
と中心市街地に住む人の日常行動の
違いに関しては、10ページをご覧
ください。移動手段、交通手段が
挙げられると思う。酒田の立地とし
て移動手段に少し乏しい。郊外では、
バス

も1時間に1本だし、電車の駅も少し遠い所にある。ということで、やはり大学周辺に住んだほうが大学に通いやすい。中心市街地に住む人は、車を保有する人が目立つ。自分たちでアパートを借りている人は自分の車を持ってそれで移動している。また、実家から通っている人は、「るんるんバス」という1時間に1本のバスを使って来ている。

あと1つ、1年生は、アパートを何年契約ということで契約してしまうので、引越がなかなか難しい。実際に、4年契約という人もいるので、まちなかに引っ張るのは、難しい。

武田准教授:先生がおっしゃった、まちなか居住と社会地域活動との関連性は、次の調査をしないと因果関係が分からない。関連性はある、高橋君等のようにまちなか居住の方が、アルバイトだけでなく、まちづくり・地域づくり活動に参加しやすいと思うが。そこも説得力をもって明らかにしていくと、さらに推進できるというご指摘をいただいている。

大西教授:今回の調査でも、全部2つの部分に分け再整理してみると何か言えそうだ。

武田准教授:そうですね。クロス集計調査が必要と思います。

大西准教授:例えば、必要な店につき「コンビニがあったほうがいい」と書いている人もたくさんいるが、その比率は大学のそばの人とまちなかの人とで多分違う。まちなかは、店がたくさんあるから。そういうふうには、この範囲内でも2つに分けるともっと見えやすくなる。

武田准教授:そうですね。さらに分析をして

みたい。2点目は、自主防災組織等で地域の中で訓練が進んでいる所と進んでいない所と、いろいろあり、今回やった所で猿田町はあまりしていない。先生がおっしゃるように「やらなければいけない」「いつかは」という頭があっても続かないのが実情。それを逆手にとってみんなが同じ目的で一堂に会する機会を、訓練等も含めて、消防団等もいろいろ協力していただき始めている。あと福祉事業者とか医療機関とか、そういうところと連携して定期的な訓練等まで実現できればさらに良いと思う。それは地域の自治に任せたいと思うので、まず刺激、きっかけづくりをしたいと思う。ありがとうございます。

司会:ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

武田准教授:どうもありがとうございました。